沖縄県立博物館紀要第３号（1977年３月）

基地内文化財調査概要
－御物城の考古学的知見－

新　田　重　清

１９７７年度の基地内文化財調査が１月11日から12日の２日間行われました。場所は那覇市の軍港内にある御物城と普天間飛行場内の旧宜野湾村字新城を中心とする未調査地域でした。調査は教育庁文化課が行なったもので，御物城の調査には文化財保護審議会第２専門部会と第１専門部会の建造物担当委員，山里銀造，又吉真三専門委員が参加しました。

本稿は，その時の調査をもとに，以前に御物城から検出された輸入陶磁器など，考古資料上からの御物城に関する若干の知見です。御物城に関する本格的な調査にそなえて，メモにしたいと考えています。

御物城は，那覇港内にある那覇石灰岩から成る孤島に城壁を構え，かって，琉球史上における大交易時代に公倉としての機能を果したグスクです。このグスクが，いつ創建され，また廃絶したのか，詳しいことはわかっていません。東恩納寛惇著南島風土記によると，15世紀の半頃尚金福時代の古地図に宝庫と記されているところが「御物城」であろうとされ，長禄３年（１４５９年）尚円が御物城御鎖側官に任ぜられたのが文献上の始見であるといわれています。御物城は貿易品収蔵庫としての役割りを果していたもので，寛正元年（１４６０年）朝鮮漂民等の報告（季朝実禄）の中に「江辺[註1]に城を築き，中に酒庫を置く，房内に大瓮を排列し，酒醪盈ち溢る，一二三年酒庫，其の額を分書せり，又軍器庫を置き，鉄甲槍剣弓矢，其中に充満せり」とあります。それ以後の御物城に関する様子は，文献上では明らかでなく18世紀に編さんされた琉球国旧記には，すでに廃絶されていたことが記されています。

今回の調査による考古資料のうえから，御物城は14世紀頃には創建され，海外貿易品の倉庫として使用されていたことが考えられ，一般にいわれている中山による貿易の開始を14世紀とする見方と一致することが想定されました。また，他のグスクに比較して15世紀頃の良質の青磁類が圧倒的に多く，他の陶磁器類の種類も豊富に出土しました。文献によると，朝貢品の中に螺殻，海巴なども輸出されていますが，海巴[註2]とは宝貝のことですが，これが多量に出土し，保存されていたことなどがわかりました。

以上は，半日位の調査と若干の資料にともづく所見ですが，正式な発掘調査によっては，御物城に保存されていた貿易品と貿易国及び御物城がいつ頃から機能し，廃絶していったかなどがわかるとおもいます。さらに，それらを通して，当時の琉球史の全体像が浮き彫りにされるとおもいます。したがって，早急に本格的な調査と保存措置が必要です。

以下，御物城に関する考古学的調査を略述します。

御物城は石灰岩の基盤の上に，普通の石灰岩石を多くはあいかた積み（石のありのままの形を利用し，互いにかみ合うように加工して積む）にし，一部布積みが見られます。石垣の勾配[註3]は，港側では５０～６０°でゆるく，東側では７０～８５°で急勾配になっています。城壁の面は全体として風波に侵食されていますが，南側では風波の影響が少なかったと見えて保存がよく，切り石の面がよくの

（にったじゅうせい・　学芸員）

図版１　御物城のアーチ門

こされています。アーチ門が北東方向に開いており，階段で昇るようになっています。米軍がアスファルト道路工事のため，南西側を一部破壊している以外は，外郭は保存もよく原形をとどめています。しかし，城内は廃絶以後今日にいたるまで，いくたの変遷があり，特に戦後，米軍による施設構築のため，２～３ｍの土砂が埋められ，地層は撹乱，埋土されて当時の状況を観察することができません。しかし，御物城が機能した頃の資料を包含している地層は，一部破壊されたにしても大部分は２～３ｍ以下の土中に埋っているものと推定されます。今回は，城内の北側の一角に1.5ｍ四方の小ピットを設けて試掘しましたが，日程の都合で地表面から１ｍ位のところまで掘り下げただけで，上述の埋っていると推定される包含層まで到達することはできませんでした。

掘り下げたレベルまでの状況は，全体として撹乱されており，赤瓦（風月楼時代のものか），ガラス片，砲弾片，ビニールパイプなどの現代遺物に混在して輸入陶磁器が検出されました。

陶磁器類の出土は，現地表面からレベル40cm間において夥しく検出されました。これは，米軍の施設構築の際にブルによって周辺から土砂とともに運ばれてきた偶然性に起因するものとおもわれます。

検出された文化遺物は，青磁，青白磁，白磁，染付，天目，黒磁などの輸入陶磁器類で，他の遺跡に比較して多量に出土しました。更に注目すべきことは宝貝の多量の出土です。沖縄のグスクからは，宝貝の殻頂を切除した加工品の網のおもりや装飾品が出土しますが，御物城出土の宝貝はすべて光沢のある未製品です。しかも，僅かな試掘範囲から大量に出土しました。これは，他のグスクには，みられないことで集積されたものとしか解釈できません。おそらく輸出用として保管されたものとおもいます。

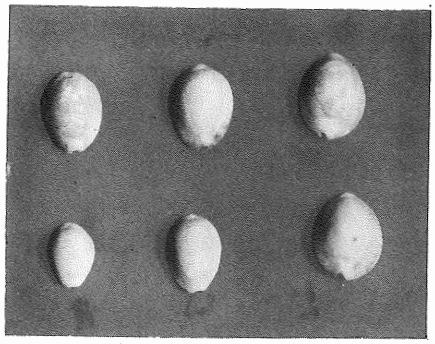
中国への貢納品の中に螺殻と海巴があります。

東恩納寛惇著「黎明期の海外交通史」によると明会典巻之百五朝貢の品目を下記のように紹介しています。「諭令二年一貢。海船百人，多不過百五十人，貢道由福建閩縣，貢物馬，刀，金銀酒海，金銀粉匣，瑪瑙，象牙，螺殻，海巴，擢子扇，泥金扇，生紅銅，錫，生熟夏布，牛皮，降香，木香，速香，丁香，檀香，黄熟香，蘇木，梟木，胡椒，硫黄，磨刀石」などとありますが，その中に海巴があります。その海巴が小葉田淳著の「南島交通貿易史」によると，１４３４年（宜徳９年）には貢納品として五八万八千個も貢納されています。小葉田淳氏が紹介された海巴なるものに特に注目

されたのは国分直一氏である。[註4] 国分直一氏によると，海己の己は「貝」の貝が落ちたもので，「爾雅」によって海己は宝貝であるとされています。

螺殻[註5]は，ホラ貝のことだろうとおもいます。螺は唐書に「螺貝」とあり，ホラ貝と説明されています。

ところで御物城については，今回の調査よりも以前に民間の研究グループによって陶磁器類が検出されたことがあります。当時の関係者によると，城内に通ずるアスファルト道路工事のため掘り起され，青磁類が散乱していたとのことです。このため，1970年6月2日から3日にかけて琉球陶磁研究会（代表者山里永吉氏）が南側の崩れた城壁から，段ボール箱2箱位いの大量の青磁類を採集しています。採集された遺物は，現在，博物館に保管されています。



図版Ⅱ　宝　貝

この資料を青磁研究では世界的にも著名な，青山学院大学教授三上次男氏に同定していただきました。その一部を写真にしたのが図版のⅢ－3とⅣです。

図版Ⅲの3は，15世紀竜泉窯出土の青磁です。上段（1～4）は口縁部で七官青磁です。下段の7は底部で見込みのところに「吉」の字がみえます。

図版Ⅳの1は，上段1が14世紀の青磁で口縁部片，2が南宋末～元代頃のるいざと呼ばれる技法の茶碗です。3は，押型に特徴がみられる明代（1368～1615）のものです。

下段は15世紀の染付で，4～6は口縁部片，7～8は底部です。

図版Ⅳの2は上段（1～4）が天目茶碗で，1～3は兎毫天目（南方天目），3が飴釉の普通の天目茶碗です。下段の5は黒磁片で，6～7は鉄釉片です。

図版Ⅳの3は上段が白磁で，1は13世紀末～14世紀頃の白磁です。4～6は影青（いんちん）の技法のみられる青白磁です。

他に御物城出土の青磁碗，完形品1点が博物館に保管されています。

戦前，銭高組が御物城周辺の浚渫工事の際に海底から検出されたもので，戦後，博物館に寄贈されました。口径13.0㎝，高さ6.6㎝，外器面に釉がどつぶりとかかつた花弁模様の青磁です。

以上，略述したように，青磁類では15世紀頃の竜泉窯出土の青磁が目立ち，量質ともにすぐれ，形態的にもバラエライーに富んでいます。一番古いものでは，13～14世紀の白磁，南宋末～元時代のるいざと呼ばれる技法の青磁茶碗などです。

これらの遺物をとおして御物城の上限を推定するならば，南宋末から元代の頃かとおもわれ，文献に始見する年代（15世紀）よりも以前に築城され，海外貿易の倉庫として使用されたとおもわれます。下限は，不明ですが，青磁類においては，15世紀頃のものが多いです。これは，琉球史における海外発展時代を反映しているかとおもわれます。なお，御物城に舶載された青磁類が島内においては，どのように分配，流通していったのか，興味ある問題ですが，輸入陶磁器の研究が進展していない現状においては今後の課題です。

これまで，御物城の考古学的知見について若干ふれてきましたが，御物城は沖縄の輸入陶磁器研究のうえからも，また，進取の気性に満ちた当時の海外発展史を考察するうえでも重要な遺跡です。

早急に総合的な調査と保存措置が要請されます。

この報文は，基地内文化財調査報告として筆者が教育庁文化課に提出したものに若干追加したものです。

末尾ながら本稿を作成するのに当り，建造物に関する所見と資料の提供をいただいた，文化財保護審議会専門委員の山里銀造氏，又吉真三氏に深く感謝申しあげ，調査を実施された教育庁文化課，筆者の所属する文化財保護審議会第２分科会の各氏に厚くお礼申しあげます。

（１９７７年３月８日）

註 1. 東恩納寛惇「南島風土記」沖縄文化協会。

註 2. ４，国分直一「南島古代文化の系譜」南島の古代文化所収　毎日新聞社

註 3. 御物城の建造物に関する所見は，沖縄県文化財保護審議会第１専門部会　山里銀造，又吉真三専門委員からのご教示によるもの。

註 5. 螺については「大字典」講談社による。

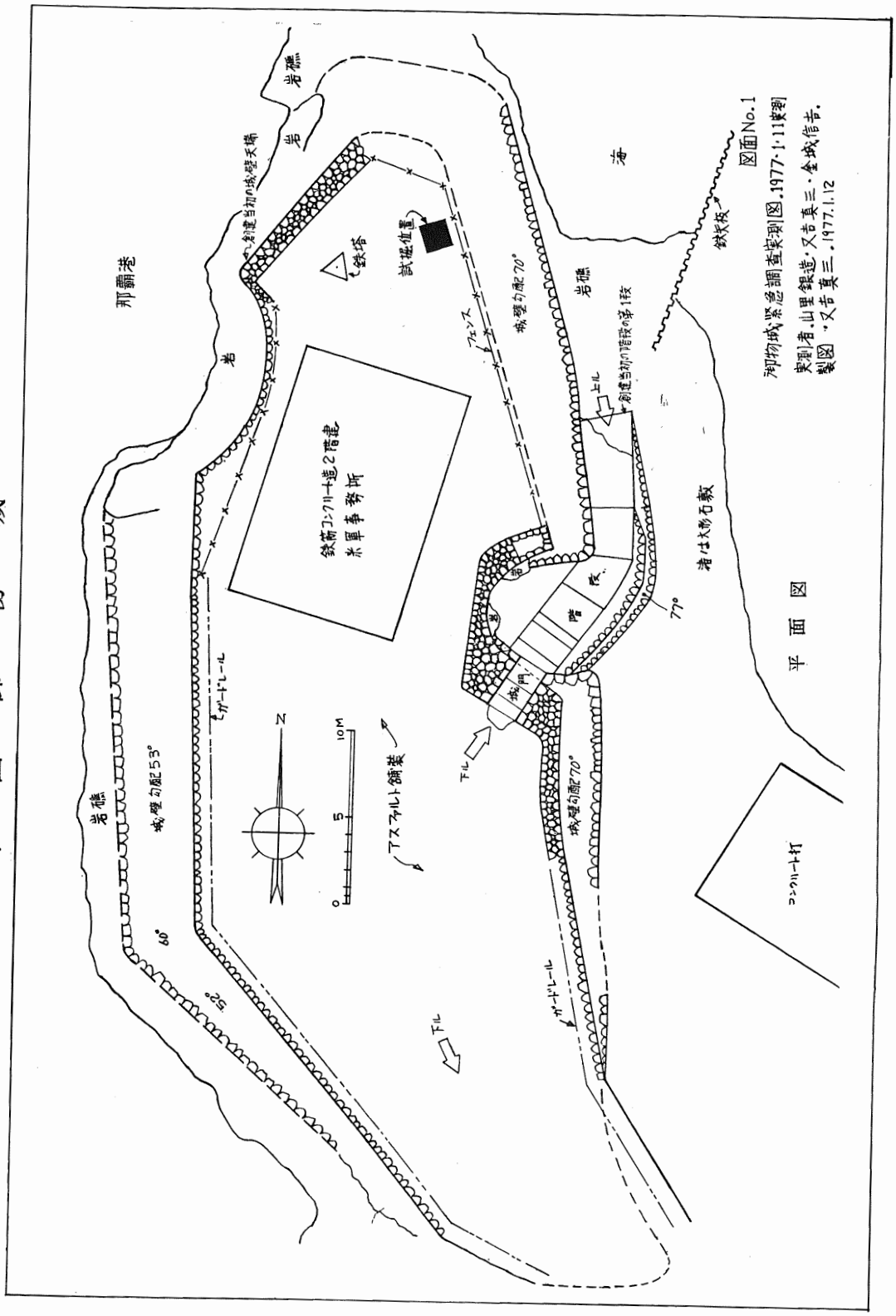
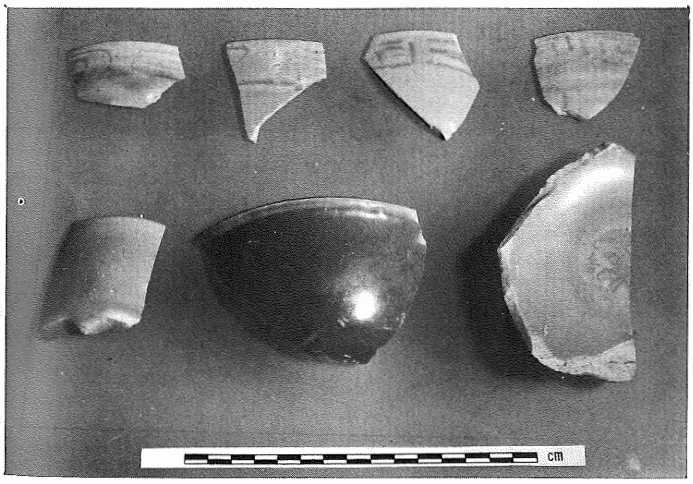

第1図　御物城
平面図
那覇港
岩礁
海
鉄塔
試掘位置
鉄筋コンクリート造2階建
米軍事務所
フェンス
城壁勾配70°
城壁勾配53°
ガードレール
アスファルト舗装
上ル
下ル
階段
城門
港は大形石積
コンクリート打
鉄柵
N
0
5
10M
図面No.1
御物城緊急調査実測図.1977.1.11実測
実測者.山里銀造.又吉真三.金城信吉.
製図.又吉真三.1977.1.12

図　版 Ⅲ

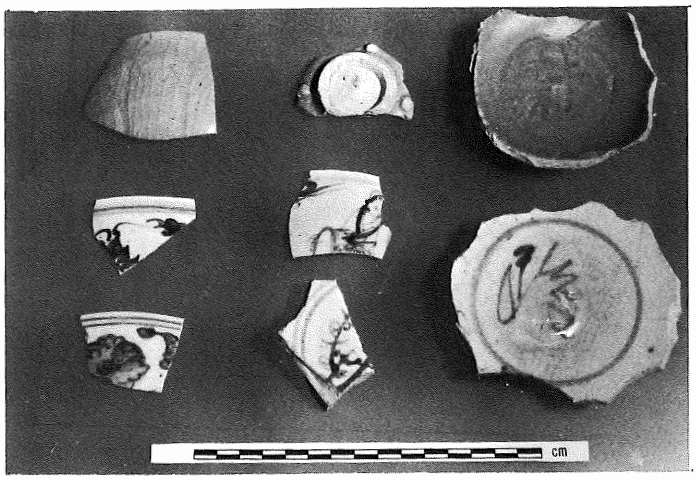
1　御物城の石垣

2　試掘ピット
　　撹乱層



3　青磁（竜泉窯）
　上段　1 2 3 4
　下段　5 6 7

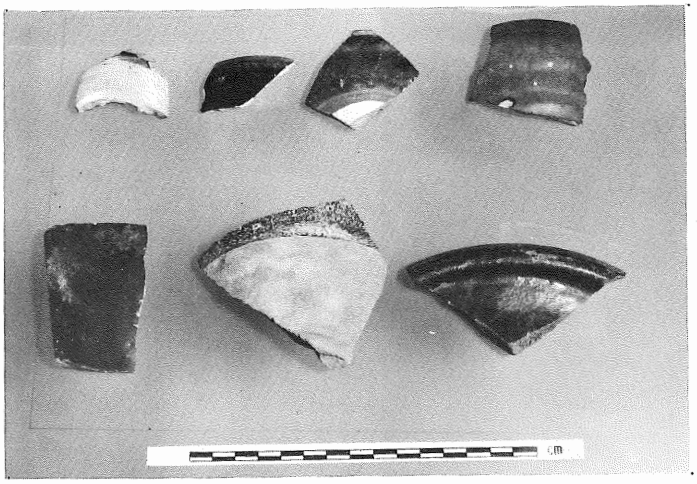
図　版 IV



1　青磁と染付

上段　1 2 3

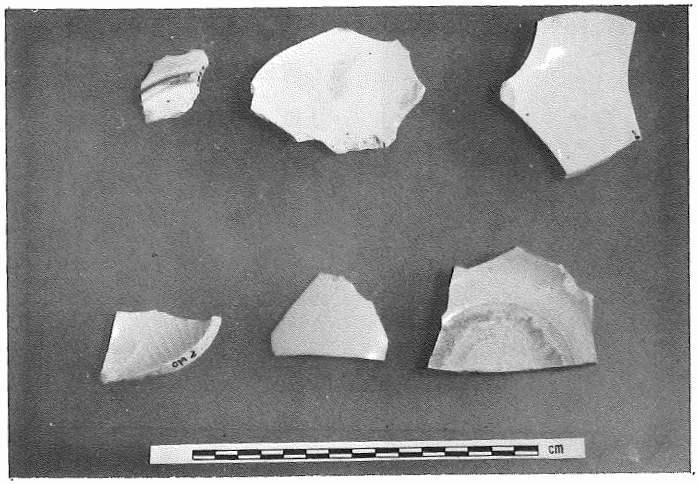
下段　4 6 8
　　5 7



2　天目茶碗と黒磁

上段　1 2 3 4

下段　5 6 7



3　白磁と青白磁

上段　1 2 3

下段　4 5 6